

航空日本けふの榮、
 目ざす世界の新記録、
 光の出づる東方の
 國の誇を示すべく、
 大膽しかも細心に、
 青春の盛り飯沼と、
 圓熟の極、塚越と、
 無上の合致奮ひ立つ。

見よ天上の萬軍の
 星の明りに、莊嚴の
 姿堂々「神風」は、
 格納庫より現はるる、

模倣の時代すでに去る、
 工業日本の國の産

「天馬長鳴駕馭を待ち、
 秋鷹整翮雲霄に
 當る」古人の句を思ふ。

「やまと心を人間はば、
 旭日に匂ふ山櫻」
 櫻を襟に二鳥人、
 長風萬里の旅に立ち、
 昇りはじめし弦月に、
 機の銀翼を照させて、
 爆音高く地を離る、

四月の六日、午前二時、
 正しく十二分四秒、
 高さ三千餘メートル、
 ただ電光の飛ぶ如く、
 瞬くひまに箱根山、
 東海道の灯を右に、
 紀州過ぐれば南海の、
 無雙の勝地、室戸崎――
 日本至大の天才の、
 遍照金剛わかき日に、
 道を修めし室戸崎、
 やがて九州佐多岬、
 やがて琉球那覇の沖、

夜は曙^{あけぼの}けわたり瞳々の、
 旭日を負うてまつしぐら、
 第一着地臺北に。

むかし東亞の天才の、
 産める空想――九萬里の、
 鵬の飛翔も外ならず、
 神機ふたび飛び翔り、
 支那大陸を右に見て、
 汕頭^{しんとう}香港^{はうこん}沖はるか、
 過ぎ行く後の天候の
 悪化すさまじ、濛々の
 濃霧まつたく眼界を

閉ざし遮る難航路。

歐亞を結ぶ難航路、

文字そのままの「天の險」

西より翔けて五天竺、

過ぎて來れる此路に、

超特急の佛蘭西の

四機ことごとく敗れたり、

世界にその名轟かす

勇士ひとしく敗れたり。

天佑神助その難を、
海南島の沖を過ぎ、

流汗淋漓拭ふまも

あらず前途にあこがれて、

着くは佛領ハノイの市、

見る一面の青草地、

郊外ジャラム飛行場、

密雲破り悠々と、

おりたつ首先の海外地、

空の大海、目に見ざる

千波萬波を押し切りて

おりたつ首先の海外地。

旭日の旗をひるがへし、

迎ふる同胞一百餘、

歡呼捧ぐる花束は、

知らず何らの芳薫か？
 三たび機上の人となり、
 また立ちあがる飛行客、
 夕陽まぶし、見わたせば、
 暹羅の國境メコン河、
 佛に捧ぐる三千の
 伽藍聳ゆる空の暹羅、
 錦繡飾り、寶玉を
 綴る白象群がれる
 平和の淨土、暹羅の國、
 その國境のメコン河、
 河を過ぐればヴァンチャン、
 エール・フランス、航空の、

地點佛領ヴァンチャン。
 やすめ二勇士、やすらかに、
 航程第一日終る、
 赤道近き熱帯の
 炎暑の惱はげしとも、
 其名も知らぬ蟲の鳴く
 夜を言音げおんの通ぜざる
 宿にやすらへ、二鳥人。

註(二) 杜少陵の句

第四章 航程第二日

航程まさに第二日、

佛領印度支那の空、
その一隅のヴィアンチャン、
日本の臣民一人なき、
異郷に嬉し佛蘭西の、
官民ひとしく慰勸に、
助け「神風」翔けしむる。
メナンを渡りマルタバシ、
途に見おろす密林の
中、炎々の大火災。

ビルマの首府のラングーン、
大聖釋尊涅槃像、
雲表高き大パゴダ、

群がるほとり二百餘の
同胞ひとしく頸を延し、
待つをやむなく飛び越して、
ベンガル灣上羽を振ふ。
累々として雲の峯、
うづまき起るわだの原、
こゝに濠洲の飛行客、
キングスフォード・スミス、彼れ
航空界の一犠牲、
遂に人界に消息を
絶ちたるところ、冥福を
祈り乍らも、睡眠の

不足の故に、朦朧の
心くらみて耐へ難し。

「奮へ！ 學國の祈あり」

大ヒマラヤを水源の
ガンジス過ぎて百萬の
大都名に負ふカルカッタ、
そのダムダムの飛行場、
群がる同胞みな涙、
しばし機體をやすらへる
間もなく再び銀翼は
颯爽として飛びあがる。

...

飛行の道に外^はづること、
距離いくばくか？ 大聖の
あと忍ぶべき四大蹟、
カピラヴステイ、ブダガヤと
聖鹿野苑、クシナガラ。

神聖の水、罪業の
洗ひ清めを乞ひ願ふ
印度教徒らガンジスに、
群がるほとりビナレスと
アラハバートを飛び過ぐる、
高度は四千餘メートル
爛々として照りつくる

大光輪ぞもの凄き。
 印度大陸飛び越して、
 落日ともにカラチの地、
 「エーダ」に歌ふ川の王、
 インドガス海に入るところ、
 著きて此の日の程終る、
 日本離れし感深し。

第五章 航程第三日

カラチを立ちて見おろせば、
 望遠鏡に月界を、
 望むが如し、荒漠の、

ただ一面の沙と山、
 絶えて青緑の色を見ず、
 やがて海峡オルムズを
 端の渺々ペルシャ灣、
 過ぎて人文の史のはじめ、
 このかた著きチギリスと、
 ユーフレイツの逢ふところ、
 治亂、興亡、盛衰の
 跡をいくたび長江の、
 絶えざる水は寫せしか。

アラビヤナイト物語、
 シンド・バットの船出せる、

バスラにしばし休らへば、
 沙漠地帯の炎熱は、
 燃ゆるばかりに身を責むる。
 バスラを後にチゲリスに、
 沿うてやすらふバグダート。
 三千年のいにしへよ！
 大バビロンの全盛の
 春いかなりし？ 中世は
 サセラン朝の名都城、
 暗緑の夜に天上の
 萬軍のあとたどるべく、
 大王ハルーン・アルラシド、

天文臺を設けし地、
 今はイラクの國の首府。
 東西二洋引き結ぶ
 定期の飛行、いにしへの
 一千一夜のロマンス、
 いま現實に結び付く。
 歐と米とに對立の、
 同じ東洋の一人種、
 有色人種先頭に、
 立てる日本に憧憬の
 思を寄するイラク國、

世界記録の光榮を、
 わが「神風」に心より、
 祈るうれしきイラク國。
 そこに唯一の同胞の
 一家三人、血紅の
 薔薇捧げて迎へ來る、
 迎へらるるも迎ふるも、
 ただ感激の涙のみ、
 神機再び空に入る、
 あとを追ふべき羽は持たず、
 あと見送りて慟哭の
 聲は空しく風に散る。

熱風黄沙の漠地帯、
 飛びつつはるか見渡せば、
 蜿蜒として幾十里、
 長蛇の如く大漠を
 横ぎり進む送油管、
 ゴールは緑波地中海、
 千辛萬苦成し遂げし
 偉なる功業！ブリトンの
 獅子王の勇衰へず、
 その驚嘆の間もしばし、
 雲表はるかレバノンの、
 山脈雪をいただきて、

左に高し、山麓は、
緑の大野、目にうれし。

亞細亞大陸今あとに！

ああ大亞細亞、大亞細亞！

西はシリアの漠のはて、

東は日本、日のはじめ、

南コモリン、海は涌き、

北ベーリング波こぼる、

世界の陸の三が一、

世界人口の半越す

十億の民すむところ、

人類こゝに生ははじめ、

邦國こゝに基おこし、

文明こゝに端開く、

亞細亞大陸今あとに！

神機は進む歐羅巴、

天風海濤聲揚げて、

日本勇士の幸祝へ！

やがて飛び過ぐ多島海、

瀬戸内海に比ふべし、

サツフォール戀に身を棄てし

恨の岬リユーガデア、

レスボス島はいづれぞや？

ヘルン小泉生れたる

サンタ・マウラよはた何處？
やがて間もなく 그리스に。

(一) 그리스のすぐれし女詩人
(二) 上野の帝國圖書館前に日本を海外に紹介せる恩人として記念碑あり

第六章 アテネ

國際親和命傳へ、
日本を立ちて三千里、
天馬の如く翔けり來て、
「神風」こゝに 그리스の、
アテネ郊外飛行場。

(一) アテネ、アゼンス、アテーネー、

藍光の目のアテーネー、
神女鎮ぜしパーテノン、
アクロポリスのいにしへよ！

(二) 「光榮そのもの、 그리스の
中にもしるき叡智の地、
智性の上に老耄を、
見ざりしといふ光明地。

ああ神聖の世の光、
「自由」の光生れし地、
(自由の光、憲政の
昭和日本の今の日に
拒まむものは何ものぞ！)

ああ 그리스二千年、
 西歐文化千載の
 源泉たりし光榮よ、
 神女に呼びてホーマアの
 歌ひし處、——玲瓏の
 心眼「イデア」を眺めたる
 プラト―道を説きし邦。

文化の光別として、
 劍華亂れてひらめきし
 テルモピリイよ、マラゾンよ、
 勝つも敗くるも愛國の

至誠ひとしく仰ぐべき
 昔を思ひわが血湧く。

今「神風」のゴールたる
 大英の國、産みいでし
 天才バイロン、百年の
 むかしマラゾン訪ひ來り、
 歌ひしところ譯さんか。

「ペルシャ犠牲の軍勢が^(五)ヘラスの劍の刃の下に
 はじめて伏せし戦場よ、ああ「光榮」の喜べる
 朝マラゾンの轟く名、神祕の咒語と成れる時、
 その時の如、其境地、無邊の譽今もあり。

その名を曰へば聞く者の目にはひとしく露はるる、陣營、軍勢、戦闘と、勝利を得たる人の跡。

逃げゆくペルシヤ、碎けし弓矢、追ひ行く 그리스、血染の大槍、

山々上に、野と海下に、「死」は先頭に「破壊」は後、光景かかりき、今いかに?……」

光景かかりき、今いかに?

その光榮の古戦場、

眺むる暇今あらず、

「ゴールのロンドンわれを呼ぶ」
あすの光榮夢みつづ、

静かに寝ねよ、二鳥人。

(一) 그리스神話、智慧の女神、アテネーの鎮むる都市、パルテノス(をとめ)の神殿アクロポリス丘上

(二) アメリカ最大詩人ポーが十四歳の時作りし名詩の中にある句

(三) 西歐最大詩人ホーマーはイリアット及オデッセイ兩大作の劈頭に神女に祈る

(四) ペルシヤと 그리스との古戦場

(五) ヘラスII 그리스

第七章 アテネよりローマに

むかし化生の白牛の

背に戀乗せて花積みて、

あけぼの清き朝汐の

海を渡りし美人の名、

その名を借れる歐羅巴、

その大陸の一隅に、

初めて疲勞補ひし、
 わが日東の飛行客。
 藍光の目の神女笑む
 昔に似たる青き空、
 四月九日午前五時
 三十五分飛び立ちて、
 三千メートル高度の上、
 グリース去りてイタリに。

猛煙猛火一朝に、
 ヘラクラリアム、ポムペイの、
 二市を埋めしヴェスキアス、
 二千餘年を続け來て、

絶えざる烟悠然と、
 たなびくを見よ、其下の
 風光明媚ベラ・ナポリ、
 サンタルチアのベラ・ナポリ、
 過ぐれば、ローマ、大ローマ！
 こゝより立ちて伊太利の、
 八機ひとしく空翔けし、
 中にフェラリン、マシエロの
 二機極東に飛び來しは、
 十有餘年のむかし、夢！

ローマよ、ローマ、「永遠の
 都」凱旋三百餘、

地中海その池となり、
 ライン、ダニユーブ、エトフレツ、
 その堀たりし帝國の、
 核心たりし跡遠し。
 その名を呼べば聯想は、
 雲の如くに湧き起る——
 その一隅のリツトリオ、
 その空港に鵬翼を、
 收め休むる間もしばし、
 「^(三)小狐流を横切りて
 往き終る時、尾を濡らす」

杉村大使慰勸の

教をしかと胸にして、
 伊太利三機誘導の、
 まにまに、又も翔け上る、
 銀翼燦ときらめきて
 南歐藍の空の中、
 瞬くひまに吸ひこまる。

- (一) チュビタアの神、白牛と化けて美人ヨロツバをかどはかしたといふ神話
- (二) アテネーロミネルヴァ
- (三) 易經「未濟」の卦

第八章 コルシカ——ナポレオン——アルプス

機翼の下に皚々の
 雪をいたたく峯ならぶ、

コルシカの島、そのむかし、
 名は一代の史を纏め、
 身は全歐の權を統べ、
 はては「世界の大地震」
 ヲイターローに敗れたる
 大ナポレオン生れの地。
 程なくカンヌ、マルセイユ、
 やがてゼネヴの清湖より、
 溢れ流るるローン河、
 その谿谷を飛び行けば、
 右手に蜿蜒連峯は、
 千古不盡の雪白し、

山嶽の王、神の御座、
 ああ雲表に聳えたつ、
 大アルプスの大偉觀！
 其アルプスの連山の中の二つの高き峯、
 ユングフラウとフィンスターアールホルンの應答を、
 ツルゲニーフの妙筆の描きしところ、君知らむ、
 百歳千歳萬歳も永劫の前ただ瞬時、
 瑤臺崩れ丘となり、寶鼎沈み水咽ぶ、
 功名富貴一場の夢と悟りの時は來ん、
 そは後——今は青春の紅血熱く飛び進め。

(一) テニスの句
 (二) 「散文詩」中にアルプスの二大峰の間答あり

第九章 佛蘭西に

「自由」「平等」「友愛」の三語をつねに口にす
 天才の國、佛蘭西に、今こそ來れ、エツフェルの
 塔はかなたに、花のパリ、ああ、花のパリ、花のパリ、
 世界第一、藝術と美との中心、花のパリ、
 その郊外の飛行場、ル・ブールジェ、飛行場、
 マストに翻^かへる旭日旗、「萬歳々々」聲は波。
 花の都の大パリよ、シャンゼリゼイよ、エトアール、
 大ユーゴの歌ひたる凱旋門はいづこぞや？
 ああ「金色の夕日受け、空の緑に照り榮えて、
 莊嚴外に比なき」凱旋門はいづこぞや？

いづこ、ルイブル、チュールレイ、ノートルダムよ、パンテ
 オン、
 また來訪の機あるべき明日を思ひて飛び立たむ。

第十章 ゴールに

パリよりサンタン・グルベール、
 白聖斷崖まつかうに、
 ドーバア海峽瞬く間、
 天佑神助全くて、
 大英の首都ロンドン府、
 その郊外のクロイドン、
 九月九日、午後三時、
 神機翼を收めたり。

費すところ九十四時、
 一萬五千キロメートル、
 亞歐の天を結び來て、
 贏ちし世界の新記録、
 文化日本の名を高く、
 世界に告ぐる勳業の
 偉なるも絶えて高ぶらず。
 炫耀夢にも求めざる
 無名の英雄その力、
 合はせて得たる國産機、
 更に舉國の激勵と、
 支援、協力、祈念との、

すべてによりて功は成る。

齋らし來るメッセージ、
 「世界平和の促進と、
 人類福祉の向上を」
 つとむる「朝日」社よりして、
 新帝即位の大典を、
 大英國に祝ふべく、
 齋らし來るメッセージ、
 「東西二洋雄邦の、
 堅き握手ぞ妖雲の、
 しばしば襲ふ今の時、
 明日の平和の基たらむ。」

第十一章 世界の驚異

「妖雲しばしば世界を襲ふ、
拂ひて明朗晴れ行く天に、
返さん任務はいづれの國ぞ？
あゝ起て「神風」！扶桑の郷を、
爆音高くも虚空をゆりて、
連ねよ大陸亞歐の二つ、
友邦大英君主の即位、
盛典祝ぐ使命を具して。」

「二萬五千餘キロメートルの、
長きを貫く虚空の航路、

起點は東京——亞細亞の中の、
至大のわが都府ゴールはあなた、
ロンドン——歐洲至大の都、
歐亞を連ぬる使命ぞ高き、
ああ飛べ「神風」！航空日本、
威力の偉なるを世界に示せ。」

「威力の偉なるを世界に示せ」
飛行の門出に望みしところ、
勳業今成る、世界の驚異！
ラヂオの電波は世界に叫ぶ！
「飯沼、塚越 ロンドン着きぬ」

ここわが極東、旭日の邦の、
 「朝日」の社しゃの前、群がり湧ける、
 夜半よはんの大衆、無上の歡喜！
 怒濤の如くに歡呼は起る、
 時ならざる雪、コンフェツチイは、
 紛々擾れて樓より降る、
 ニユースのフライヤ今こそ勇め。

ああ「ゴール・イン、ゴール・イン」

「……千代に八千代にさざれ石……」
 澎湃たるかな、狂へる渦の
 中より湧きづる國歌の調べ、
 夜半の興奮はてなき國都、

おなじく東西南北かけて、
 八州隈なく「狂熱」走る。

「日本のアルプス」山麓近く、
 平和の一村、飯沼生める、
 南の穂高は狂喜の叫び、
 大空高くも夜半の煙火。
 塚越うまれし故郷の碓氷、
 鳥淵村、三里に互る
 峽地はこぞりて感激溢れ、
 勇士の譽を稱ふる歡呼。

第十二章 第二の使命

勇士の第二の使命は来る、
歐洲主要の國都を訪はむ、
國際親善、飛行の旅に。

眞先きに着くはブリュッセル、
ベルギーの首府——聯想は、
五年に亙りし世界戦、

「公法ただに一片の
紙」と宣して中立の
地帯侵せし敵の軍、
奮然として立ちあがる

英武、義侠のアルベルト。

テルモピライに三百の
寡兵ひきゐて、百萬の
ペルシヤの軍に手向ひし、
スパルタ王のレオニダス、
似たり、寶劍鞘走り、
リイジ、ナミュル暫くは
怒潮と溢れ、大山の
崩るる如きチュートンの
虎狼の兵を喰ひ留めき。

衆寡敵せず、國破れ、

老幼男女四方に散り、
彈丸黒子、一塊の
地のみ残りしその昔、
エルエーレンの慷慨の
筆の描きし慘愴の

「祖國の破片」その昔。

五年のあした光明の

曙あけて蘇へる

邦は靈鳥、フェーニクス、

死灰の外に新たなる

姿現ぜしそも昔。

嘗つて杉村楚人冠、

使となりて寶刀を

獻ぜし「朝日」社のゆかり、

ゆかりは深きベルギイの

皇帝今はレオポルド、

今日「神風」の二勇士に

破格の謁の榮賜ふ。

第十三章 ベルリンに

世界大戦やみてより、

このかたこゝに十九年、

時は流水の如く過ぐ。

軍閥國を誤りて、

「世界を敵に」雄たけびつ、

百戦つねに百勝の
譽れ馳せしも皆空し、
遂に無惨の國の厄。

ホーヘンツォレン崩壞の後に政變いくたびか？
左右兩極の争に斃れし犠牲いくばくか？

リーブクネヒト、閏秀のリクセンブルグ、アイスネル、
エルツベルゲル、ラーテノウ、時の潮は洗ひ去る。

さはれ剛健、チュウトンの意氣衰へず、金剛の
堅きを碎く一念に再び興る國の運。

明日の運命それいかに、昨日の敵は今日味方、
利害錯綜、邦國の未來を誰か測り得む。

ルーテル、カント、ライプニッツ、ゲーテ、モツァルト、ベート
ベン、

光明高く照りし邦、ラインの流、中にして、

パスカル、デカルト、ザルテイル、ルソー、モリエル、ユー
ゴの、

輝く邦と向ひ立つ、やめよ！「宿怨」ゆゆしき句。

全歐羅巴聯邦の夢を抱きて今は無き

すぐれし頭腦、ブリアンの靈たまはいづこぞ、内政と
外交ともに比類なきああブリアンの靈いづこ？

聞け極東の聖天子、いみじき御製「四方の海、
皆兄弟はからと思ふ世になど波風の立ち騒ぐ」

「劔を取るもの、劔に因り亡ぶ」の教、二千年、
橄欖山の夕暗に祈ささげし神人の、
百丈の像、洋々のラインの岸に刻み立て、
ラテン、チュウトンもろともに膝を屈せん時來るや？

その夢成るは百年か百千年の末の世か？

理想の現化末遠し、

理想たやすく成らずとも、

理想に向ひ進み行く、

正に人類の大使命、

大ユーゴの曰ふところ、

「ミューズの使命、そは理想」

世界の平和理想たれ！

わが白日の夢は醒む、「神風」降る、現實の、
今ゲルマニア、新興のテンペルホーフ飛行場。

金剛の意思、研究の底に徹して倦怠を

知らぬ特性、一切の科學、工業、藝術に、

ことに純正哲學に世界一流ゲルマニア。

その先進の國にして「神風」褒めて航空の
將軍フィツシ慇懃にわが極東の客迎ふ。

獨創の才乏しくて始めは常に慕倣のみ、
さはれ陋習破り棄て、廣く世界に知を求め、

常に出藍こゝろざし、集大成の美を致す、
正に日本の特性か、二千餘年の史は語る。
聯想盡きじ——「神風」よ今飛び移れフランスに。

(一) カミュ・フラマリオンの小説「世界の終」参照
(二) ユーゴー論文「シエークスピア」の中に

第十四章 再びパリに

妙齡十六、奮ひ起ち、
祖國の難を救ひ得て、
果は火刑に亡びたる、
千古の奇蹟ジャヌダルク、
生めるフランス、天才の
邦、英靈の憑るところ、

「神風」再び翔け來る、
世界航空の中心地、
斯界の名士雲の如、
群がる中に荒天の、
猛雨犯して、堂々と、
わが「神風」は翔け來る、
ル・ブールジェ飛行場。

異郷の空に響く時、
わが極東の邦の子に、
つねに潜然熱涙を
催ほさしむるわが國歌、
續いて起る勇壯の、

「アロン、ザンファン、……パトリイユ」
 百年むかし國の厄、
 壯士髪立つ世の亂れ、
 亂れの中に湧きし歌、
 勇壯外に比たぐひ無く、
 「銀餅ぎんぺい碎け、水はしり、
 鐵騎突き出で槍は鳴る」
 詩人の譬喩をそのままの
 聞け、フランスの大國歌！

その大國歌ひびく場ば、
 飛行聯隊三十四、
 二十年前の世界戰、

中に秀いでし功名の
 聯隊の旗、其前に
 敬を捧ぐる二鳥人、
 やがて蕭々の春の雨、
 煙るが中に花のパリ、
 プラリス・ド・ラ・コンコルド、
 シヤンゼリゼイの大道路、
 はては光榮のエトアール、
 十二の大路逢ふところ、
 晴には「金色夕日受け、
 空の碧に照りはえて、
 莊嚴ほかに比なき」
 凱旋門の立つところ、

世界の中の最大の
 凱旋門の立つところ、
 建立まさに百年の
 門もなかに國のため、
 斃れし無名の英雄の
 記念碑、淨火つねに燃ゆ、
 黙禱捧げ香の高き
 花輪供ふる二鳥人。
 一千九百十八の
 世界大戦、ただ中に、
 わが極東の快男兒、
 建武中興、楠氏の出、

その名、小林祝之助、
 フランス航空兵伍長、
 青春まさに二十七、
 六月七日、ダンキルク、
 勇敢無比の空中の
 戦、——その機、敵弾に
 焼かれ、見る見る猛火焔
 斯くと見るよりためらはず、
 バンド解して飛び降る
 一萬尺の高きより、
 落ちて微塵と碎けたる——
 鬼神も哭かむ壯烈の
 むかし思ふや二鳥人！

第十五章 再びイタリアに

今二鳥人「神風」の
國際親善使命帯び、
再び向ふイタリアに。

イタリア、イタリア、南歐の

空は濃藍、野は眞紅、

ひなげし火焰と燃ゆる郷

「ミルテ靜かに、ロルビーレ、

緑に高く立つところ」

二千餘年の遙かなる、

むかし世界の王たりし、

ローマ帝國の中心地。

關河霸國の興亡を、

經て近代の文明の、

曙光はじめて照りし邦。

二十四番の春の花、

東亞の曆にいふ如し、

ルネイツサンス一代の、

衆芳競ひて目を眩す、

眞先きにダンテ・アリギエリ、

中古千年の偉なる聲、

繼ぐレオナルド・ダ・キンチ、

ミケランジェロウ、ラファエロと、

チチアノ、コレジオ、チントレト、
 皆イタリアの名の上に、
 千秋の光照らしむる、
 同じくともにペトラルカ、
 またタツソとアリオスト、
 其の光榮の傳統の
 桂の譽れ、南歐の
 薫り、ミューズの恩寵の
 厚きガブリエレ・ダヌンチオ、
 今はガルダの清湖の地、
 わが「神風」を聞き知るや？

世界大戦たゞなかに、

アドリアの海、アルプスを、
 越して飛行の機上より、
 ドナウの岸の敵城に、
 爆弾ならず、檄文を、
 雪と降らせしダヌンチオ、
 大戦亂の曉の
 一千九百十九年、
 東亞飛行を企てし
 詩人の詩想實を結び、
 八機ひとしく飛び立てる、
 中にフェラリン、マシエロの
 二機長空を飛び渡り、
 エネチア公子、いにしへの

マルコ・ポーロの夢みたる
極東日本に翔けり來ぬ。

フエラリン、マシエロ翔けり來し

南方航路東亞より、

飛びて「神風」イタリアに、

今親善の命傳へ、

飛びおるリトリオ飛行場、

女流飛行家スパニョリニ

捧ぐ紅、薔薇の香、

杉村大使導きに、

飛行候補ら若き群、

その檢閲も亦うれし。

うららに曙くる空ローマ。

キリナーレの宮殿に、

イタリア皇帝エマヌエル、

けふ飛行士に謁賜ふ、

玉音やさし、印度より

沙漠を翔けし難航を

勞^{ねが}ひ給ふ——感激に、

満ちて退く二鳥人、

エネチア廣場訪ひ來る、

イタリア統一記念塔、

その塔上の記念碑は、

空軍犠牲のあと忍ぶ。

イタリア統一このかたの、
 過ぎし春秋六十五、
 日本の維新ほほ近し、
 建國三傑また似たり、
 西郷、大久保、木戸——彼れに、
 マチイニ、カブール、ガリバルディ。
 「わが心臓を開き見よ、
 そこに『イタリア』の文字あらむ」
 熱烈無比の祖國愛、
 更に人類愛厚き
 デュセベ・マチイニ、千載の

俠骨薫る、残したる
 精華「人間の義務」を讀め。

(一) ゲーテの名詩「ミニオンの歌」

(二) マチイニの名著

第十六章 サンピエトロと法王宮

ローマ七つの丘の一、
 ヴァチカン丘上聳えたる
 天主教の大本山、
 サンピエトロ寺——其傍に、
 法王宮はまた竝ぶ。

ミケランジェロ、ブラマンテ、

世界の名工築きたる、
 サンピエトロ寺、世界一、
 殉道の使徒聖ペテロ、
 其墓の上建てられし、
 見よ、キリストの大伽藍、
 〔古今の殿堂、神壇の
 中に比すべき者あらず、
 威嚴と力と光榮と
 強さと美との據る處〕

法王住めるおほいなる、
 宮、壯麗と豪華との
 權化、パラッツォ・ヴァチカノ

千載長し、傳統の
 法界無上の大權威、
 サン・ピエトロのむかしより、
 二百六十一代を
 數へ、世界の三億の
 信徒率ゐる大權威、
 今日極東の「神風」の
 二勇士こゝに敬拂ふ、
 飯沼、塚越敬拂ふ。

(一) バイロンのチャイルド・ハロルド第四卷

第十七章 再びロンドンに

歐洲諸首都經廻りて、

國際親善使命終へ、
 「神風」再びロンドンに、
 テームス河畔儼として、
 七百餘萬民數へ、
 豪富に誇るアルビヨンの
 その大首都のロンドンに。

(一) テムズが正しき發音なれど一般に日本にてテームスと曰ふ

第十八章 友邦ブリタニア

ユニオン・ジャックひるがへる
 七つの海と大陸の
 五つのおのおの屬領を
 有し、太陽その域に、

沈むことなきブリタニア。

シエークスピアの生れしところ、
 ニュートン、ダーキン思索の邦土、
 大憲章の成りてより、
 七百餘年春移り、
 人民及び王室の
 間、靄々和らぎて、
 自由の光照る處、
 憲政運用全くて
 左——共產無政の狂愚、
 右——頑迷固陋の化石、
 見ること稀のブリタニア。

「『上帝』『人生』『至上善』——
 思をこゝに寄せぬ者、
 經綸の任負ひ難し」
 哲人ジョージ、パークレイ、
 其言記せる名相は、
 逝けど風韻なほ薫る。
 「ただ人類の慶福に、
 寄與し得る時、邦國の
 存在はじめて意義あらむ。」
 善いかな宰相ボールドキン。
 そのブリタニア、新帝の

即位大典日は来る、
 一千九百三十七
 五月の十二日は来る。

(一) バルフォア

第十九章 英皇即位大典

千年の古刹、一隅に、
 シェイクスピアの像立てる、
 「西の御堂」の神聖の
 院内今見る即位禮。
 典禮儀式いにしへの
 ままに一毫變ぜざる、

大英皇帝即位禮、
世界六十三ヶ國、
代表寄せて院内に
星の如くに群がれる、
八千餘人——その前に、
けふ莊嚴の即位禮。

「承認」「宣誓」「聖油塗る
式」に續きて百千の
珠玉點ずる寶冠は、
正に新帝の頭の上、
潮と起る祝禱の
歌一齊に、院外は

歡呼の喇叭、殷々と、
皇禮砲は鳴り渡る。

第二十章 新帝放送

雨に暮れ行くロンドンには、
今宵正しく不夜城府、
煌々として極まらず、
爛々として限り無し、
光の海か、幻影か、
狂喜亂舞のはてし無き、
そのただ中に靜肅に、
暫く返る、——何事ぞ、
聞け、新帝は帝領の、

四億の民に玉音を、
電波に因りて宣べ傳ふ。

「百千萬の國民に

對し一致と協同の

象徴となる王冠を――

感謝す――神の恩寵と

世界に互る大英の

聯邦國の自由意思、

其撰びより戴けり。

「君臨即ち奉仕なり、

人類至高の徳――奉仕。

乞ふ、上帝の加護により、
此大任に當るべし。

「永く一心同體に、

相互自由の結合に、

因りて固めむ、ブリタニア、

かくして地上一切の

友邦ともに世の平和、

進歩の爲めに盡すべし」

妖雲しばしば襲ひ來る、

そを明朗の天とする

任はいづれぞ、東西の

雄邦、我と彼とあり。
金枝玉葉凜として
列邦使節の先頭に來る
立たせたまへり、——國際の
親善使命——大典を、
祝ぐ「神風」今歸れ。

第二十二章 「神風」の凱旋

「神風」歸れ、三千里、
再び歐亞の空結べ。

玄妙の「神祕」人界の
一切を統ぶ、——英皇の

戴冠式に先んずる
六日、あなたのアメリカの
レイクハースト空港に、
アトランチック横斷の
航路の「ゴール、空港に」
「ヒンデンブルグ」巨大なる
「空の宮殿」焼け亡ぶ！
ああゲルマニア、學術の
精を集めて組み立てし
「ヒンデンブルグ」焼け亡ぶ！
三十餘人、焼け亡ぶ！

世界大戦たゞ中に、

ドーバ海峡北に越し、
 豪富を誇るロンドンの
 幾百萬の膽冷し、
 巨大の怪鳥霹靂を
 胸に抱きて、大空に
 嘯ぶく中に、冷かに
 笑みしレーマン、更に後、
 一千九百二十九の
 世界一週「ツェッペリン」
 空飛ぶ船の楫とりし、
 名士レーマン亦亡ぶ。

アインシュタイン算したる

光年五千億萬を
 周とすと曰ふ大宇宙、
 その浩渺の空間に
 ただ一微塵、わが地球、
 蠢々として中に住む
 二十億人、日の照らす
 同じ一時、限りなき
 歡喜、哀愁、哄笑と、
 涕涙まじる人界の、
 暗よ光よ運命か？
 人間知力限りあり、
 成否畢竟みな命か？
 成否を外に其分を

盡して人生意義あらむ。

今、天佑と神助とに
因りて「神風」飛び返る。

世界記録を印したる

ロンドン郊外、クライド、

三十六日過ぎ去りて、

五月の十四、朝早く、

再びこゝに銀翼を、

東亞に向けて打ち振ふ。

ロンドン、ローマ、アテネ過ぎ、

別れを告ぐる歐羅巴、

亞細亞に入りてダマスкас、

バスラ、カラチとカルカッタ、

ラングーン、ハノイ、臺北を、

歸航の道に飛び越して、

安らに着くや、オーリエント。

「萬歳」「萬歳」雷の如く、

全都の歡喜、波と湧き、

千代田の宮にかしこくも、

至尊親しく謁賜ふ。

飯沼、塚越、運命の

寵兒、ほまれを天に謝せ！
 頭を垂れよ、襟正せ！
 その眼の前に玉樓も、
 茅舎も、けだし區別なき、
 尊とき「無限者」天にあり、
 玄妙、不可説、ただ神祕、
 尊き神祕、人界の
 一切統べて天にあり。

(昭和十二年五月 信州淺間山麓星野温泉に於て)

(長谷部製本)

□此の文庫は、内容厳選と最低の廉價とを以て第一義とし、専ら大衆普及を目的として刊行す。
 □此の文庫に收容するものは、東西古今百般の書に互り、校訂、註釋、翻譯、總て典據たるべきを期す。
 □此の文庫は、社會、經濟、政治、哲學、思想、歴史、文學、藝術、美術等百般に及ぶ。
 □表紙意匠中、1は十錢を、2は二十錢を、3は三十錢を示す。以下之に倣ふ。
 □定價及び送料左の如し。

表紙背の符號	1	2	3	4	5	6	7	8
定價(錢)	10	20	30	40	50	60	70	80
送料(錢)	三六六六九九二二四							

昭和十四年六月十六日印刷
 昭和十四年六月十九日發行

改造文庫 第二部 第三百八十六篇

增補訂正 天地有情

定價五十錢

版權所有

著者 土井 晚 翠
 發行者 山本 三生
 印刷者 青野 仙吉
 東京市芝區新橋七丁目十二番地
 東京市芝區田村町四丁目二番地

發

兌

改

社

東京市芝區新橋七丁目十二番地

振替口座東京八四〇二番

電話芝(43)

四三二一
番番番番

(所 刷 印 野 青)

改造文庫第一部目録

Table of contents for the first part of the 'Revised Library' series, listing titles like '富論', '人口論', '経済学原理', and '神と國家' with authors and page numbers.

Table of contents for the second part of the 'Revised Library' series, listing titles like '経済科学概論', '近代の戀愛觀', '唯物論史入門', and '中産階級史' with authors and page numbers.

獄窓	から	和田久太郎著	5
人	波	原久二郎著	3
結婚の悲劇	原久二郎著	5	
苦難の路(上)	原久二郎著	4	
苦難の路(下)	原久二郎著	4	
芭蕉書簡集	萩原嘉月校訂	3	
草雙紙	尾崎久彌編	5	
矢鳥柳	堂志賀直哉著	2	
焚	火志賀直哉著	2	
老	人志賀直哉著	2	
網走	志賀直哉著	2	
速夫の妹	志賀直哉著	2	
好人物の夫婦	志賀直哉著	2	
雪の	日志賀直哉著	2	
暗夜行路(前)	志賀直哉著	3	
短歌	集石川啄木著	4	
詩	集石川啄木著	5	
小説集(上)	石川啄木著	6	
小説集(下)	石川啄木著	5	
評論感想集(上)	石川啄木著	4	
評論感想集(下)	石川啄木著	4	
書簡集(上)	石川啄木著	5	
書簡集(下)	石川啄木著	4	
チロルの谷間	三浦正信著	4	
国歌	八論土岐善麿編	3	
三	人島崎藤村著	3	
出	發島崎藤村著	4	
新選秀歌百首	齋藤茂吉著	3	
性に眼覚める頃	室生犀星著	4	
多情佛心(前篇)	里見淳著	3	
多情佛心(後篇)	里見淳著	3	
苦の世	界宇野浩二著	3	
山戀	ひ宇野浩二著	4	
天保赤門黨	土師清二著	5	
血染のパイプ	甲賀三郎著	4	
平妖傳(上卷)	佐藤春夫著	4	
平妖傳(下卷)	佐藤春夫著	3	
都園の憂鬱	佐藤春夫著	4	
自選短篇集	林房雄著	7	
斬るな	他九篇白井喬二著	5	
大暴風雨時代	前田河廣一郎著	5	
浅草紅團	川端康成著	5	
女性譚	他四篇片岡鐵兵著	5	
喧嘩駕籠	長谷川伸著	5	
角兵衛物語	長谷川伸著	5	
唐人お吉	十一谷義三郎著	2	
時の唐人お吉	十一谷義三郎著	4	
笑ふ男・笑ふ女	十一谷義三郎著	5	
或る女(上卷)	有島武郎著	4	
或る女(下卷)	有島武郎著	3	
星座・生れ出る惱み	有島武郎著	4	

有島武郎戯曲集	有島武郎著	4
有島武郎書簡集	有島武郎著	5
有島武郎日記集	有島武郎著	4
社會詩集	生田春月著	5
戀愛詩集	生田春月著	5
彌太郎	笠子母澤寛著	4
神變麝香猫(上卷)	吉川英治著	4
神變麝香猫(下卷)	吉川英治著	3
女	給廣津和郎著	5
伊太利物語	平井肇著	5
闇の力・生ける屍	昇トリストイ著	4
蟹工船	工場細胞小林多喜二著	4
不在地主	オルグ小林多喜二著	4
迷	路有島武郎著	3
旅する心	有島武郎著	2
小なき者へ	石にひ有島武郎著	2
愛惜	はみ森なふく有島武郎著	2
短篇	集有島武郎著	2
感想	集有島武郎著	2
俳諧續七部集	宇田久校註	4
其角七部集	宇田久校註	4
牧水歌集(一)	若山牧水著	4
牧水紀行文集	若山牧水著	4
明治大正詩史概観	北原白秋著	4
長悪	魔トリストイ著	3
アロシ短篇集(五月)	磯原惟人著	3
貝殻追放(上卷)	水上瀧太郎著	7
貝殻追放(下卷)	水上瀧太郎著	7
歌鏡	葉羅田空穂著	4
新我等の心	モウパッサン著	4
牧水歌集(二)	若山牧水著	4
牧水歌集(三)	若山牧水著	4
好色一代男	神谷鶴伴校註	5
チエーホフ傑作集	昇トリストイ著	4
人類文化史物語上	ヴァン・ルーニン著	5
人類文化史物語下	ヴァン・ルーニン著	5
青牛集	古泉千樞著	5
葛西善藏小説集一	葛西善藏著	3
葛西善藏小説集二	葛西善藏著	4
葛西善藏小説集三	葛西善藏著	4
葛西善藏小説集四	葛西善藏著	4
葛西善藏小説集五	葛西善藏著	3
葛西善藏小説集六	葛西善藏著	3
葛西善藏感想集	葛西善藏著	5
頼朝・爲朝	幸田露伴著	3
幽秘記	幸田露伴著	6
青年(上卷)	林房雄著	4

青 年 (下巻) 林 房雄著 4	穂口一葉選集(三) 穂口一葉著 5	シユロツフエン クライスト著 6	シユタイン家の人々 濱野 修譯 6	ヘルマン戦争 クライスト著 5	野蠻人達・敵・子供達 八住利雄譯 6	どん底(他一篇) 昇曙夢譯 4	私の大學・番人・初戀 藤原惟人譯 6	戀についで 藤原惟人譯 6	回 想 外村史郎譯 5	隨 筆 集 上 藤原惟人譯 4	折たく柴の記 新井白石著 伊豆公夫校註 6	ホムブルクの公子 濱野 修譯 4	チエルカツシユ(他七篇) 中村 白葉譯 6	潜水艇乗組員 中垣虎兒譯 3	妾の半生涯 福田 英子著 4	父 と 子 昇曙夢譯 6																						
色ざんげ(他十篇) モウパッサン著 秋田 滋譯 3	初 雪(他九篇) モウパッサン著 秋田 滋譯 3	泣 蟲 小 僧 林 英美子(刊) 3	日記の中から 湯浅芳子譯 4	蕩兒歸る(他二篇) 渡山修三譯 2	戀をしてみて(他二篇) 渡山修三譯 2	ブツデンの人々(一) 吉良良吉譯 4	ブツデンの人々(二) 吉良良吉譯 4	ブツデンの人々(三) 吉良良吉譯 4	ブツデンの人々(四) 吉良良吉譯 4	オク家の人々(一) 吉良良吉譯 4	オク家の人々(二) 吉良良吉譯 4	オク家の人々(三) 吉良良吉譯 4	オク家の人々(四) 吉良良吉譯 4	小鳥を友として 木村 毅譯 5	静かなドン(一) ショロホフ著 4	静かなドン(二) ショロホフ著 4	静かなドン(三) ショロホフ著 4	静かなドン(四) ショロホフ著 4	開かれた處女地(一) ショロホフ著 6	開かれた處女地(二) ショロホフ著 6	開かれた處女地(三) ショロホフ著 6	開かれた處女地(四) ショロホフ著 6	開かれた處女地(五) ショロホフ著 6	開かれた處女地(六) ショロホフ著 6	開かれた處女地(七) ショロホフ著 6	開かれた處女地(八) ショロホフ著 6	開かれた處女地(九) ショロホフ著 6	開かれた處女地(十) ショロホフ著 6	開かれた處女地(十一) ショロホフ著 6	開かれた處女地(十二) ショロホフ著 6	開かれた處女地(十三) ショロホフ著 6	開かれた處女地(十四) ショロホフ著 6	開かれた處女地(十五) ショロホフ著 6	開かれた處女地(十六) ショロホフ著 6	開かれた處女地(十七) ショロホフ著 6	開かれた處女地(十八) ショロホフ著 6	開かれた處女地(十九) ショロホフ著 6	開かれた處女地(二十) ショロホフ著 6
憂 鬱 (他四篇) ゴーリキー著 袋 一平譯 4	新編シラー詩抄 小栗季則譯 8	私は愛す アウヂエンコ著 湯浅芳子譯 6	瀧口入道 高山樗牛著 2	密 航(他二篇) 平井 肇譯 3	ロビンソン物語 梅田 寛譯 4	風 俗 石坂洋次郎著 4	童 謡 諸川端康成著 4	悪 太 郎 尾崎士郎著 5	忘れ得ぬ人々 國木田 獨步著 5	白き手の人々 吉屋信子著 7	白藤村隨筆(上) 島崎藤村著 6	白藤村隨筆(下) 島崎藤村著 6	星湖編藤村隨筆(下) 島崎藤村著 6	書 簡 集 藤田正信譯(刊) 6																								

異性は招く 菊池武一著 3	エゴール・プルーイテヨフ 杉本良吉譯 3	法王廳の抜穴 生島遼一著 6	ルテツイア(第一) 土井 義信譯 5	可愛い女(他三篇) 梅田 寛譯 5	六號室・接吻(其他) 梅田 寛譯 4	あだ花(他数篇) モウパッサン著 4	脂肪の塊(他数篇) 秋田 滋譯 4	狂人日記(他数篇) モウパッサン著 4	諷刺短篇集 山田 次郎著 4	コ サ ッ ク 中山省三郎譯(刊) 2	ヂーキル博士と 下村 白葉譯(刊) 2	死せる魂(上) 中村 白葉譯(刊) 2	死せる魂(中) 同 2	死せる魂(下) 同 2	誘惑者の日記 神保 光太郎譯(刊) 5	ライン牧歌譜 浦上 后三郎譯(刊) 4
現代 男 梅田 実譯 5	萬葉集略解(全五册) 加藤 千蔵著(刊) 5	ミルゴロド 平井 肇譯 4	紅 玉(他六篇) 石中 象治譯 2	不用人の一生 上 藤原惟人譯 6	サランポオ(上) フロオベール著 2	サランポオ(下) フロオベール著 2	斷鴻零雁記 飯 野 朝暉著 4	風 物 帖 佐藤 新一譯 5	美しき青春 植村 敏七著 4	平賀元義歌集 植村 敏七・野田 共編(刊) 4	フアピアン(下) 小松太郎譯(上) 34	短 歌 作 法 窪田 空穂著 6	石 川 啄 木 金田一京助著 5	全釋俳諧七部集(第一) 萩原 露月著 3	全釋俳諧七部集(第二) 萩原 露月著 3	全釋俳諧七部集(第三) 萩原 露月著 3
全釋俳諧七部集(第四) 萩原 露月著(刊) 3	全釋俳諧七部集(第五) 萩原 露月著(刊) 3	全釋俳諧七部集(第六) 萩原 露月著(刊) 3	全釋俳諧七部集(第七) 萩原 露月著(刊) 3	巴里の胃袋(下) エミール・ゾラ著 上 5 武井無想譯 下 4 (以下續刊)												

新刊書目

性 と 性 格(上)	性 と 性 格(下)	社 會 學 入 門	文 化 風 土 (英文學史その他)	カ ム チ ヤ ツ カ 紀 行	全 釋 俳 諧 七 部 作 (卷一)	死 の 勝 利(上)	ふ る さ と 紀 行
村 ワ イ 上 啓 ゲ ル 著 譯	村 ワ イ 上 啓 ゲ ル 著 譯	本 田 喜 代 治 著 譯	丸 山 誠 次 著 譯	中 垣 虎 兒 郎 著 譯	萩 原 蘿 月 著	原 ダ ン ム ン 謙 次 著 譯	竹 越 和 夫 著 譯
45	45	50	60	50	30	50	50

最新刊書目

機 械 ・ 他 七 篇	牧 水 歌 論 歌 話 集	支 那 游 記	俳 諧 師 ・ 續 俳 諧 師	愛 弟 通 信	智 慧 の 悲 し み (四 幕)	情 熱	藝 術 の 限 界 ・ そ の 他
横 光 利 一 著	若 山 牧 水 著	芥 川 龍 之 介 著	高 濱 虚 子 著	國 木 田 獨 步 著	ハ グ リ ボ イ エ ー ド 著 譯	ス テ ア ン ・ ツ ワ イ グ 著 譯	佐 藤 一 正 彰 著 譯
40	50	40	50	40	30	30	20

